

書評

小沢輝智著

Institutions, Industrial Upgrading and Economic Performance in Japan

The Flying Geese Paradigm of Catch-up Growth

評者 中内恒夫(国際基督教大学名誉教授)2006.1.10.

1 雁行形態論の詩と真実

赤松要教授を創始者とし、小島清教授により継承発展された雁行形態論は一橋大学の伝統的な国際経済論のいわば看板理論とでもいうべき業績と言えよう。相模湾上空を飛ぶ雁の列を仰いだ赤松教授の詩心を刺激したことから、経済学では珍しい詩的な名前がつけられたことは有名である。もとはある商品の輸入から始まる曲線が、やがて輸入代替による国内生産曲線を導き、それがやがて輸出曲線に連がるという曲線の姿が雁行形態に似ているのでこういう名前がつけられたわけである。

だが、近年、経済発展分析が盛んになるにつれて、この創始者の詩的着想は若干一人歩きをして、種々の広範な意味で用いられる傾向を生じた。輸入、生産、輸出の時系列の曲線から離れて、先頭を飛ぶ雁、それに続く後続の雁という経済発展の序列を強調する呼び名となった。新聞や雑誌など一般的な出版物の中ではむしろこの用法の方が多くなった。例えば英国、米国、欧州、日本、NIEs、ASEANなどの発展序列がイメージされる場合である。

詩のイメージと科学的真実はしかし、定義的には明確に区別される必要がある。このことはしかし、雁行形態論がひろく人口に買われていることの証左でもあるから一概に排斥すべきではないが同義語の乱用による混乱は科学的ではない。

2 日本経済の発展分析と小沢説

小沢教授もこの序列的意味で雁行形態を使用しているが、9頁に断わった上でのことである。すなわち、赤松教授は3つのパターンを考えていて、第一のパターンでは輸入、生産、輸出を、第2のパターンでは消費財から資本財、さらに複雑な財に進化すること、さらに第三のパターンでは発展段階が進むにつれて国のグループ化が進むこと(**alignment of nations**)を明示したとする。

注意深く定義問題を扱おうとする意図は、それに続いて示される小沢教授自身の日本経済発展分析のための重要概念を引き立たせるためと考えられる。

(10~11頁)。つまり、今日の途上国の経済発展において、先進国(グループ)と接触、**interaction**、を通じて後続追跡者の利益が発生すること、その根拠は技術移転がますます短時間に行われる傾向にある。小沢教授のこの書物は赤松教授の第1、第2のパターンに限定して分析を進めており、第三パターンについては日本とアジア諸経済との関係についてあたらしく別の本を書くところである。

さて小沢教授の注目すべき分析上の概念は高度化 (upgrading) である。これは発展段階説であって、この着想はシシュンペーターの影響を強くうけている。本書は赤松小島理論の研究(解説)書ではなく、あくまで赤松小島理論を参考としつつ自らの日本経済分析を行おうとするものである。そういう理解で本書を読むと、小沢教授は一種の歯止め (ratchet) 効果をもった段階分析、つまり一度到達すれば逆行して後戻りしない高度化過程を考えていることが読み取れる。15頁に図示されている段階によると、5段階が考えられている。第1は労働に立脚するヘクシャー・オリーン段階、第2は鉄鋼・化学のようなスケール段階、第3は自動車のごときアセンブリー段階、第4はマイクロチップやコンピュータのようなR&D段階、そして第5が情報のようなインターネット段階である。日本経済は後戻りしない、歯止め装置付きの段階としてのこの5段階を経過してきたというのだ。

もちろん日本の発展はここで止るわけではなく、現在進行中のDNAのような生命工学、さらに超微細領域のナノ・テクノロジーも視野に入っている。そこで問題になるのは、より高度な発展段階へ移行せしめる要因は何かということである。要素賦与率だけが問題なら、あるいは市場経済要因だけが決定因ならば事柄は簡単である。だが、現実には比較優位の決定には自動的要因のみでなく、政策的要因が大きく作用する。小沢説の特徴はまずその孜たる現実分析にある。経営学の分野にまで広領域の情報蒐集を行っている。本書では政府の要因を注意深く観察し、少なくとも先進経済の追い付き過程では賢明な政府の政策に大きな評価を与えている。より高次の発展段階へ移行せしめる歯止め効果をもつ諸要因として考えられるのは、賃金上昇、貯蓄増大、通貨価値の増大、知識の蓄積、熟練度の向上、資源や環境の制約などである。(162頁)。だが同時に市場機構を支えるような政府の政策が不可欠である。この点で小沢説はC・ジョンソンやD・オキモトよりもさらに積極的に政府の役割りを評価する。本書の構成の優れたところは、効果的な章の配列と見出しの選択である。読者はその見出しに沿って順序よく小沢説に導かれる仕組みになっている。

発展段階における高度化に際して、先進経済との接触と学習が重要であると同時に本書の着目するところは、その学習過程での独創力の発揮である。その例が、アセンブリー段階におけるトヨタの生産方式である。たんなる模倣でなく、日本的手法の開発を積極的に評価している。小沢教授は米国で育ち、米国人として観察していることが、一種の *productive distance* とでもいべき効果を発揮していてクールな分析を政府の役割りについて進めるが、追い付き過程におけるMITIの先見性についてもその評価はおおむね積極的である。小沢説の背景となる教授自身の経済学的背景について筆者は、その業績を多く読んだわけではないので、断言はできないが、すくなくとも新古典派的一元論とは相当異なる。むしろ古典派経済学や、とくにシシュンペーターの発展論に依拠するところが大きいようだ。だから、日本経済発展の仮説をたてる際にも、過去と断絶して飛躍しようという創造的破壊という概念の影響を強くうけてお

り、ヒュームやヴェブレンからも自由に概念を取り入れている。この広範な折衷主義が本書の説得的分析を支えている。

だが本書の日本経済分析を明解なものにしている最大の原因は、特に戦後の日本経済発展の高度化分析を中心にすえて、その分析の基本的枠組みとして雁行形態論を用い、雁行形態分析の諸概念を使っている点にあると考えられる。赤松小島理論があくまで経済学の正統派的論脈を追って、新古典学派の内在的な理論構築に膨大な研究エネルギーを投入しているのに比して、小沢説は古典学派の政策的ヴィジョンを縦横に取り入れて、現実分析の攷たる実証的研究から経済発展過程の解明を行う折衷学派たるところに特徴がある。

3 日本経済の将来と小沢説

本書は期せずして日本経済の昨日、今日、明日という 3 つの時間的スパンに読者の関心を誘う魅力的発想を含むものである。だが、赤松説の第 3 パターンとされる、日本とアジア諸国との関連については、まえにも述べた通り、将采分析すると約束されているだけで、詳述は見られないのが残念だ。この結果が待望されるところである。しかし、本書を熟読すると、若干のヒントは得られる。だが同時に質問してみたい点もでてくる。以下若干その点に付言したいと思う。

ヒントというのは、本書の巻末に近い 9 章に論述されている制度的要因の考察から得られる。日本政府の経済・産業政策の中核をなした通産省に関して小沢教授はおおむね積極的評価を与えており、官僚達の夏を想超させる。だが、日本の政治制度については米国との比較をするせいかなかなか厳しい。自民党の過去の政策が構造的歪曲をつくり出したことを否定しない。例えば、プラザ合意以降の円高は行き過ぎであって日本企業の海外移転が過剰であったこと、また農業保護政策などである。あるいは戦後のオーバーロ-ンは社債発行を制限し過ぎたことに原因があるという指摘等等である。世界的にグローバリズムが進むと、日本国内の政府依存体質は、世界の第 2 番目の経済大国には相応しくない構造的歪みを露呈することになる。

さて、これからの我が国の経済構造はどうなるかを考える時に、小島教授と、小沢教授の残された問題、そしてこれからの研究計画に含まれた問題の解明が大きな期待をもって待望される。小島教授の場合は雁行形態論の第 3 巻の中核をなすべき国際金融秩序であり、小沢教授の場合は先述の赤松教授の開拓された第 3 のパターンとなる日本の対外経済関係論の分析である。

小島教授の壮大な雁行形態論の立論・発展についてはここで詳述する余裕はないが(註)、日本とアジアの協力的国際関係を構築するためには参照さるべき極めて重要な国民経済的条件を含むものである。小沢教授は、海外ではもっとも多くの著書・論文を雁行形態論について書いた学者として、来るべきこの 2 人の碩学の労作を刮目して俟ちたけものである。

(註) 書評として書かれた次の3つの拙論を御参照下さい。

- 1 中内恒夫 「小島清教授の貿易政策提言の由由貿易論的基礎」駿河台経済論集 第5巻第2号(1996年3月)
- 2 中内恒夫 「小島清 英論文選集(貿易・投資・太平洋経済圏)」世界経済評論 1996年8月
- 3 中内恒夫 「小島清著 雁行型経済発展論(第2巻)」世界経済評論 2004年6月

著者の Terutomo Ozawa 氏はコロラド州立大学教授。発行は Edward Elgar社。2005年刊。234ページ十Xviiページ